



μ （ミュー）は積み木で密室をつくる

クトゥルフ神話 TRPG

LOCKED ROOM MADE OF BUILDING BLOCKS

μ が持つ、人知を超える知識や技術。

それは、神との接触にも近い事象を引き起こし、
魅せられた人間は、我々に協力を惜しまないだろう。

— 教典『 μ （ミュー）に誓って』

クトゥルフ神話 TRPG

オリジナルシナリオ

「 μ （ミュー）は積み木で密室をつくる」

■シナリオタイプ

クローズド / 謎解き / ショートシナリオ / 戦闘なし / キャンペーン

推奨人数：3~5 人

所要時間：3.5h~4h

推奨技能：＜目星＞＜医学＞＜追跡＞

- ・ 謎解きのタイプ：ひらめき＜論理的思考＞。
- ・ 探索者の選択によりエンディングは生還 or ロスト。
- ・ 生還の場合、同じ PC で続編へ続くシナリオあり。
- ・ 呪文（門の創造）の自己解釈を含む。

・ 参考作品

『今際の国のアリス（麻生羽呂）』 / 『G シリーズ（森博嗣）』

■セッション概要（GM 用）

探索者は、脱線・損壊してしまった列車車両内で意識を取り戻すが、車両の中は見ても無惨に荒れ果て、死体も転がっている。探索を進めていく中、「 μ （ミュー）」という存在を崇拝する宗教団体によって人為的に引き起こされた事故だと知る。出口が塞がっている列車から脱出・生還を目指す。

■解決方法

- 1、舞台が脱線・損壊した列車の車両であることを思い出す。
- 2、車両や死体から、この列車に施された「仕掛け（ガス）」を読み解く。
- 3、「仕掛け」を解き、教団の信者から「門の創造」の存在を知る。
- 4、路線図、切符などのアイテムから列車の先頭車両（進行方向）を推理する。
- 5、**進行方向である先頭車両にて、「門」を開き現実世界へ脱出・生還する。**

■ハンドアウト

- ・描写の中にヒントが存在している場合があるため、GM への描写再確認・メモ推奨。
- ・探索者が普段使う「移動・交通手段」を確認しておくといい。
(車・バス・電車・徒歩 / 「電車」と答えた探索者<知識>判定の参考)
- ・ある漫画(『今際の国のアリス』)から、一部ギミックを引用しているため探索者がシナリオ中、気づいたとしてもネタバレ禁止を予告。
- ・一部の呪文について、ルルブと差異があることを探索者に予告。

■シナリオ解説と表記の仕方

ページ中央にある罫線から

- ・左側にストーリー描写や技能による判定
- ・右側に GM 情報や補足。

セッションは左側の描写のみを伝えるようにする。

【使用する記号、文字色の意味】

◎<技能名> 技能のダイスロールに成功した場合の結果を表記。

名前「台詞」 GM が操作するキャラクターのセリフ。

シナリオ上、必要最低限のことしか表記しないため
キャラの性別や性格、状況などでアドリブ・アレンジする。

◇メモなど シナリオ攻略に必要なヒント。どどんとふの共有メモなどで
プレイヤーに文字として共有する情報を表記。

■NPC



μ(ミュー)を崇拝する小人たち(準黒幕ポジション)

ミ=ゴに協力する人間です。既に脳は取り出され、管理されています。死亡しているためセリフはありません。

目出し帽を被っており、脳が取り出された身体は既に機能を失っているため、身体の一部が腐敗しています。

表向きは、Y 大付属病院の医師、看護師。ミ=ゴの狂信者。



ミ=ゴ(導入役及び、黒幕ポジション)

探索者が乗車した列車車両を脱線させた黒幕です。

シナリオ上、姿を表しませんが、μ(ミュー)として文中に表記があります。人間が知ることのできる領域を遥かに超えた知識・技術を有しており、自らを崇拝する人間を協力者として、その知識・技術を提供するかわりに協力者を操り、人間の収集を行っています。Y 大付属病院の技術や知識はミ=ゴ提供。

μ(ミュー)は、アルファベットの「M」の語源となったギリシャ文字です。ミ=ゴ(Mi-go)の頭文字である「M」から。

シナリオ開始 / 描写・判定

探索者に残された最後の記憶。

それは、人々がパニックになり、騒然となる光景と轟音が鳴り響く狭い空間にいたこと。

次の瞬間、視界が『ガクンッ』と大きく揺れ、

そのまま何かに体を強く打ち付け、そこで意識は途切れてしまう。

どれくらいの時間意識を失っていただろうか。

目を覚ました場所は、砂煙（すなけむり）が舞い、薄暗く奥行きのある場所に自分は倒れていた。

視界がまだはっきりしない中、周りの様子を確認すると、その空間は荒れ果てこの場所で何が起こっているのか理解することができなかった。

※マップ背景、もしくはイメージ画像の挿入

GM 情報 / 補足情報

シナリオ導入

走行中の列車の描写。

鉱山資源が豊富に眠っている N 山を掘って造ったトンネル内部にて、

ミ=ゴが地震を引き起こし、列車を脱線・損壊させる。

目的は、乗客の殺害と回収。

突然の状況と何が起っているか分からない不安を煽るために、導入時点では

「大破した車両」「列車の脱線」など、状況については探索者に明言を避ける。

探索者に「絵」として状況を伝える目的。

はっきりしない視界を再現するため、全体的にイラスト加工・ぼかしている。



※イメージ画像

同ダウンロードファイル内：脱線車両

◎＜アイディア＞※探索者全員強制

探索者はそれぞれ、何らかの目的を持って列車に乗車していたことを思い出す。
その列車が走行中、突然の大きな揺れに襲われ脱線・損壊したことを理解することができる。

◎＜幸運＞※探索者全員強制

成功：体全体に痛みを感じるものの、自分の体に目立った外傷はない。**ダメージ 1**
失敗：体のところどころに出血があり、全身に激痛が走る。**ダメージ 1d3+1**

探索者の行動・ロールプレイ開始

※探索者から「所持品を確認する」と宣言があった場合、下記の＜目星＞判定。

◎＜目星＞

普段身につけている持ち物はすべて無事である。
また、自分の懐からこの列車の【乗車券】を見つけることができる。

【乗車券】

乗車券を見る限り、環状線 N 山鉄道の「N 山駅」から「Y 大付属総合病院前」までの乗車券であることが分かるが『なぜそこに乗車、向かっているのか』という目的が思い出せない。

※探索者が【乗車券】を見た上で「路線図」「地理」について探索者から言及があった場合

◎＜アイディア＞

【乗車券】から「環状線 N 山鉄道の路線図」を思い出すことができる。

成功しても、乗車した「目的」「何号車」「進行方向」「脱線した場所・位置関係」など「電車に乗車した」という実感以外、思い出すことはできない。

失敗した場合、ここがどこで、どのような状況なのか整理できない。
車両内に「つり革」「座席」が散乱していることから、
他の探索者との会話や、ロールプレイなどで成功した時と同じ結果が得られる。

＜幸運＞に成功していても、体全体に痛みがあるため
重いもの（座席やがれき、重量のある所持品）を持つことができない。
各車両の扉を長時間抑えておくこともできない。（扉は自動的に閉まり、重量があるため）
各車両の接続部分にある扉に何かを挟む、扉を押さえるなどへの対策。

失敗しても、所持品は無事である。しかし、【乗車券】を失くしてしまっている。
携帯電話は、トンネル内部での事故なので機能を失っている。

「N 山駅」から「Y 大付属総合病院前」までちょうど半分の乗車距離・料金となる。
路線図を手に入れても電車の進行方向（右回り・左回り）がどちらか分からない。

→画像の挿入・表示【環状線 N 鉄道 路線図】

【目を覚ました車両（5号車）】

車両の中は、座席や荷物を置く棚などが崩れ、足場は非常に悪い。
一般的な列車の車両であり、奥の方には次の車両との接続部である扉、
後方にも扉があるが、形は歪み、衝撃がものすごかったことが窺える。
割れている車窓から外の様子を見るが、真っ暗で何も確認することはできない。

【後方にある歪んだ扉】

変形した扉を見ると「制御機関室」と書かれたプレートが扉に貼られている。
機関室内の様子は損壊が酷く、多くのがれきで中の様子までは分からない。

◎＜アイディア＞※扉を調べると宣言した探索者のみ / GM 裁量により省いても良い。

その歪んだ扉を見て、なんとなく違和感を感じる。

※何に対しての違和感なのかという具体的な明言は避ける。直感的な感覚。

※シナリオ・推理の進行具合を見て、後々に判定を挿入しても良い。

※探索者が前方の車両へ移動、車両内を詳しく探索すると宣言した時

足場の悪い車内から、2人の人間が倒れていることに気がつく。
ひとり目は目出し帽を被った、ガスマスクをしている体格の良い男性。
もうひとり目は身なりの良い、一般乗客であろう男性。

【ガスマスクをした男】

目出し帽を被っているので表情を読み取ることはできない。

既に死んでいることが分かるが死因は不明。

◎＜目星＞or＜医学＞※判定に失敗しても「紙切れ」は発見できる。

体を見ると手足の一部が腐敗していることが分かる。

後頭部には大きな血のシミができています。また、懷を調べると「紙切れ」が出てくる。

この車両が先頭車両（進行方向）である。

脱線した場所がトンネル内部のため、車窓から外を見ても真っ暗で何も見えない。

扉は歪んでいるため、探索者の純粋な力（STR）では開けることができない。

＜アイディア＞による違和感は「制御機関室」という部屋の名称及びプレート。

※制御機関室は一般的な列車には存在しない。蒸気機関車の石炭をくべる場所である。

※プレートは探索者にこの部屋が操縦室だと気づかれないためのフェイク。

※探索者から「制御機関室」という質問や確認について「操縦室」だと明言は避けたい。

☆扉のプレートは外すことができ、そのプレートの下に隠れて「操縦室」と扉に表記がある。
この時点で気づく技能判定を入れるかは GM の裁量で。1号車にヒントとなる描写あり。

職業 [駅員、車両製造業者、鉄道関係者など] は＜知識＞で判定可能。

違和感の正体及び環状線の列車車両であることから、

この先は「操縦室（操縦席）」になっていることを知っている。

※環状線車両は右回り・左回りの運行に対応するため、先頭車両と最後尾車両に操縦室がある。

目出し帽を取ると、後頭部にぼっかりと穴が空いており、
頭蓋の中にあるはずの脳がなく、赤黒く、空洞になっている。

SAN チェック 0/1d4

身体の一部の腐敗は、脳が取り出され、身体として機能しなくなり血が巡っていないため。

◇教典にある文中『それまで身体が持てば良いのだが ...。』という文章は、
腐敗が進行し、自身の身体が使い物にならなくなることを小人は危惧している。

◇「懐から出てきた紙切れ」

その列車は人間の目には見えない即効性のガスが、5両あるうちの1両に充満している。
避難してくる乗客を、その車両に全員誘導させるため、
乗客全員がひとつの車両に集まらない限り、その先の車両の扉が開くことはない。
各車両は乗客が全員乗り込んだ瞬間、前後の扉は自動的に閉まり、5分間ロックし密室にする。
5分経過後、充満しているガスは外に排出される。
ガス排出後、ガスを吸い込み、動かなくなった人間を μ (ミュー)に捧げよ。
君たちは先頭車両へ進み、列車内から脱出せよ。 — μ を崇拜する小人たちへ。

・男が装着していたガスマスク
口元だけを覆うタイプのガスマスクである。
このガスマスク単体では機能せず、酸素ボンベが必要だと分かる。

【乗客であろう男性】

目を見開いたまま、全く動かない。様子を見ると、とても苦しんで死んでいったことが分かる。

◎＜目星＞or＜医学＞

身なりが良く、持ち物から「医者」であることが分かる。死因は医学的検知から見ても不明。
この乗客の持ち物から、救急医療用具を入手できる。
※この乗客から切符は出てこない

◎＜アイディア＞※死体に技能判定をした探索者は追加ロール

自分たちと同じ車両で見つかった死体にしては、外傷が見受けられないことに違和感を覚える。

◎＜追跡＞

前方にある扉の方から引きずられたような跡がある。

【前方車両への扉（5号車から4号車への扉）】

なんとか原形をとどめており、手動で開けることができる。しかし、扉は非常に重く
手を離れた瞬間、扉の重さから勢いよく自動的に閉まるものであることに気がつく。

「紙切れ」の内容を簡単にまとめると以下の通り。

どどんとふやチャットに表記すると分かりやすくなる。

探索者が間違った解釈、誤解している場合は下記のようにアナウンスすることを推奨する。

- ・5両あるうち1両に目には見えない即効性のガスが充満している車両がある。
- ・探索者全員が同じ車両に乗り込まない限り、次の車両の扉は開かない。
- ・各車両は、全員が乗り込んだ瞬間、自動的に扉は閉まり5分間開くことはない。
- ・ガス車両は、探索者が全員その車両に乗り込み5分経過後、ガスは外に排出される。

【ガスの補足情報】※GM 専用情報

- ・ガスは目に見えない透明なもののなので扉を開けて車両の中を確認しても
ガスが充満しているかどうかは分からない。
- ・ガス車両の扉を開けた場合、扉は自動的に閉まるのでガスが前の車両に漏れだすことはない。

次のシナリオへの伏線要素。このシナリオ上あまり重要ではない。

先頭車両である5号車の出口が病院である。

5号車が最後尾車両であるかのようなミスリード・ブラフ素材。

見つかる医療用具はひとつだけ。使用できるのは探索者達のうちひとり。
怪我に対して<応急手当>自動成功の効果。(1回限り/使い捨て)

損壊が一番少ない3号車で生き残り「非常出口」がある1号車へ避難。

そこでガス封入にあい、苦しんで死亡。

ガスマスクの男が医者死体の1号車から引きずり、この車両に運んでいる。

探索者が所持品の何かを挟む（携帯電話、鞆、身体の一部）と宣言した場合
挟んだものを破壊する。仮に身体の一部を挟んでいた場合下記の判定。

HPの半分を失い、ショックロール+挟んだ部位の欠損+SANチェック 1/1d4+1

<回避>もしくは<幸運>で上記の判定を回避。

【2 両目の車両（4 号車 / セーフ車両）】※酸素ボンベなし / 全員で次の車両に移動を宣言

探索者が、扉を開けて車両の中に入ると、

扉は勢い良く自動的に閉まり『ガチャリ』と施錠されるような音が響く。

しかし、探索者全員の身体に変化・異常は見られなく、どうやらガス車両ではないことが分かる。

扉を開けたすぐ手前に【トイレ】と【車掌室】があることに気がつく。

そして、座席と座席の間に 1 体の「人間であろう」死体が横たわっている。

◎＜追跡 -20＞※車両の床に対して

前方車両に続く扉（3 号車）から、今開けた扉（5 号車）まで人間大の大きさのなにかが、引きずられたような跡があることに気がつく。

【車掌室】

乗務員用の用具が床に散乱している。

また棚には、この車両の「見取り図（全体マップ）」があること気がつく。

【トイレ】

トイレは男女共用の洋式トイレが設置してある。

また、トイレ内部にある小さな棚には「探索者人数分のガスマスク」と

「探索者の人数分の枝分かれしている管の伸びている酸素ボンベ」が 2 個、置かれている。

・トイレから見つけた「ガスマスク」

目出し帽を被った男がしていた同じガスマスクである。

使用された形跡がなく、同じくあった酸素ボンベの管を口元に接続して使用するのだと分かる。

しかし、見慣れない形をしているため酸素ボンベを装着するために多少の時間を要する。

・トイレから見つけた「酸素ボンベ」

ガスマスクと併用し使用すると 5 分間、外部の空気を遮断し

新鮮な酸素を吸引することができる。使い切りタイプの酸素ボンベである。

見慣れない特徴として、酸素ボンベは 1 本に対して探索者の人数分の管が伸びている。

酸素ボンベの側面には「5:00」と、時間が表示されており

ガスマスクに装着してから、その表示されている分数が減っていくのだと想像できる。

酸素ボンベなし / 探索者の一部が次の車両に移動を宣言した場合

扉を開けて車両の移動する。しかし、探索者の身体に変化・異常は見られない、

どうやらガス車両ではないことが分かる。

※以降は左側にある描写の「扉を開けたすぐ手前に ...」から描写する。

※探索者に対応策がないため必然的にセーフ車両だとメタ的に気がつける。

◇「懐から出て来た紙切れ」より

・各車両は、全員が乗り込んだ瞬間、扉は閉まり 5 分間開くことはない。

上記の条件にて全員で乗車した場合のみ、左側の描写のように車両前後の扉にロックがかかる。

5 号車の「医者」の死体を引きずった跡。引きずられた跡はその 1 つだけである。

前方車両に続く扉は「4 号車から 3 号車へ続く扉」のこと。

→マップ背景を変更：車両の見取り図

探索者の数：3 人 → ガスマスク 3 個 /3 本に枝分かれしている管の伸びた酸素ボンベ 2 個

探索者の数：4 人 → ガスマスク 4 個 /4 本に枝分かれしている管の伸びた酸素ボンベ 2 個

ガスマスクと酸素ボンベについて ※前作からの改変部分

・車両に乗車した瞬間にガスマスクを及び酸素ボンベを装着することはできない。

・枝分かれしている管を誰かひとりでも装着した瞬間から 5:00 から 1 秒ずつ減っていく。

・管の長さは 1m ほどで酸素ボンベを中心に半径 1m ほどに探索者は密着する必要がある。

・車両と車両を仕切っている扉に管だけを通して移動した場合、扉は管を切断する。

上記のことから、探索者は全員で「次の車両に乗車するか、しないか」を判断することになる。

※イメージが伝わりにくい場合には参考画像をカットインなどで挿入する。

→カットイン「酸素ボンベの補足説明」

【人間の死体】

顔や体つきから男性のものであることが分かる。

しかし、座席と座席に挟まれ、押しつぶされたような形となり

すぐには「人間である」と認識することはできなかった。

また、その近くにはその男性が読んでいたであろう新聞が落ちている。

◇新聞記事「環状鉄道線にて列車が行方不明」

某月某日（シナリオ上の日付から1週間前）午後2時頃、

環状鉄道 N 山線にて、車両が行方不明になる事件が発生する。通過駅に定刻となっても電車が現れず、運行車両の位置を確認するが発見できないことから警察に通報し、この事件が浮き彫りになった。

また、最後に確認された時刻と同時刻に N 山トンネル入り口付近にて、青白く光る謎の発光現象と強い地震のような揺れを感じたと鉄道作業員からの証言が得られている。鉄道局員と警察・消防の立ち会いのもと現場検証・捜索を進めているが現場には車両や乗客の姿はどこにも見当たらない。脱線事故であればその車両が発見されるはずであり、脱線した可能性は低いとし、警察と消防は引き続き調査を続けている。

◎<目星>or<アイディア>※「他に気になる記事を探す」「裏面を見る」などの宣言で自動成功。
新聞の裏面の記事がふと、目に入る。

◇新聞記事（裏面）「今年新設された Y 大付属病院、評判上々」

Y 大付属病院では、他の病院で受け入れを拒否された重症患者や二次救命の受け入れ対応、新薬の開発と処方などを積極的に行っている。この病院の医院長である内藤氏は「一人でも多くの命を助けるために当院の技術を惜しみなく患者に提供する」と声明を発表した。しかし、一部開発中の新薬を実験的に重症患者に投与するという黒い疑惑も出ており、病院の技術や、設備、投薬などの情報は公開されていないため不明点が多い。また、治療を終えた患者は、睡眠あるいは麻酔処置中に悪夢を見た、と話していることが取材を通して明らかになった。

しかし、搬送された患者はどんなに重い病気や怪我でも完治することから、内藤医院長や医師、看護師への信頼は厚く、病院自体の評判も上々である。

死体を目撃したことによる **SAN チェック**は、テンポが悪くなると考え入れなかったが、GM の裁量では判定を入れても良い。**SAN チェック 0/1d2（既に死体を見ているので軽め）**

新聞の発行日はシナリオ上の日付（GM の任意で日付は決定）
過去に同じような事件・事故が発生している。
探索者が巻き込まれている状況を明確にするための要素。

発光現象は「門の創造・活性化」による青白い光。
地震はミ=ゴによる採掘機によって引き起こされた。

◇新聞記事（裏面）の記事内容については、今回のシナリオ上では関係しない。
次回のシナリオへの伏線要素。

「内藤医院長」の名前はニャルラトホテブをもじったもの。
次回シナリオの黒幕。

【前方車両への扉（4号車から3号車の扉）】

前の車両で開けた扉と同じ作りの扉である。

※探索者が全員が4号車にいる場合

なんとか原形をとどめており、手動で開けることができる。

※探索者が全員が4号車にいない場合（探索者が別行動をしている場合）

扉が歪んでいて開けることができない、施錠されていて開けることができないのか分からない。

◎＜鍵開け＞

扉は何かで自動的にロック（施錠）されている感触がある。

◎＜物理学＞

扉のゆがみ具合を見ても開けられるはずだが、開けることができない。

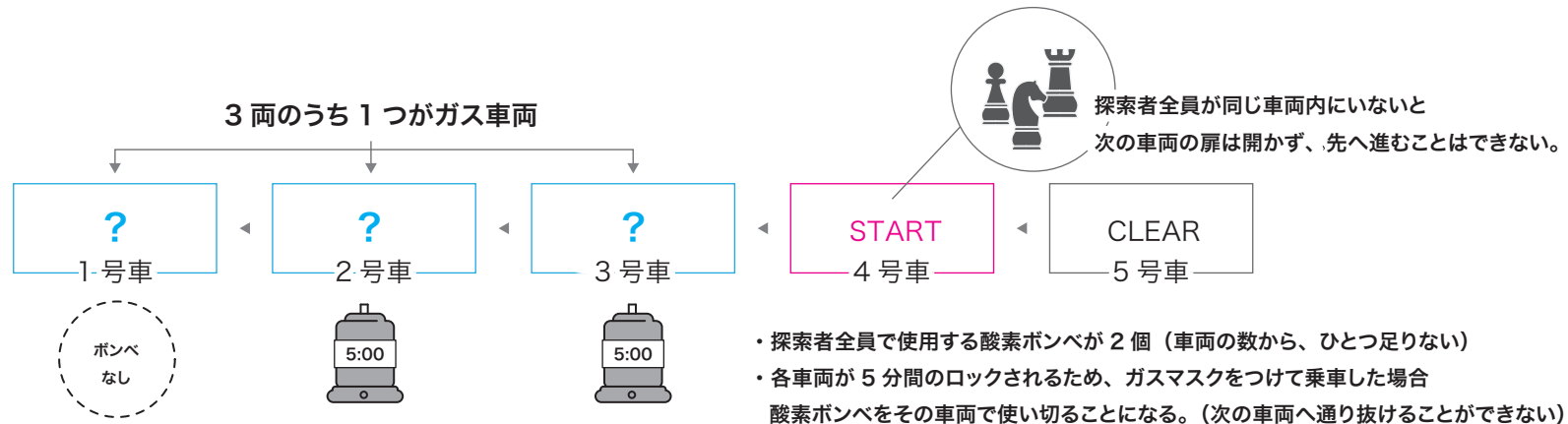
◇「懐から出て来た紙切れ」より

・探索者全員が同じ車両に乗り込まない限り、次の車両の扉は開かない。

上記の条件にて、3号車と2号車も同様に誰か一人でも別れて行動している場合には扉はロックされていて開けることはできない。描写は左側の描写・判定の通り。

鍵開けに成功しても、扉を解錠することはできない。施錠されている感覚のみ。

ガスのギミックについて



ガスが充満しているかもしれない車両の扉を、『酸素ポンベ無し』で1度は開けなければならない。

『今際の国のアリス』 参考

【3両目の車両（3号車 / セーフ車両）】※酸素ボンベなし / 全員で次の車両に移動を宣言

探索者が扉を開けて車両の中に入ると、扉は勢いよく閉まり『ガチャリ』と施錠される音が響く。しかし、探索者全員の身体に変化・異常は見られなく、どうやらガス車両ではないことが分かる。

車両内の様子を確認すると、比較的損壊の度合いは軽く
かるうじて原型をとどめている座席があることに気がつく。
しかし、その座席に座っていたであろう乗車客の死体が目に入ってしまう。

【乗車客の死体】

探索者に向かって前の座席に覆い被さるように、うつぶせで倒れている女性を発見する。
服装を見るに、一般乗車客であることが分かるが、
脱線による衝撃で頭を強く打ったのか、頭部から血が流れている。
動かない様子から見て既に死んでいるものと想像がつく。

◎＜目星 -40＞or＜医学 -40＞

死因は頭部を強く打ったことによる挫傷。頭蓋骨は割れており
確実に生きてはいないことが分かる。また、荒れた座席の隙間から「乗車券」が出てくる。

【乗客から出て来た乗車券】

環状線 N 山鉄道「N 山駅」から「C 浜緑地公園」までの乗車券である。

◎＜追跡 -20＞※車両の床に対して

床にはいくつも足跡を発見するがそのほとんどが「2号車へ続く扉」と伸びている。
それに反して、前方車両への扉から後方車両への扉に何かが引きずられたような後がある。

【前方車両への扉（3号車から2号車の扉）】

前の車両で開けた扉と同じ作りの扉である。
また扉の上部には、「環状線 N 山鉄道の路線図」があることに気がつく。

※酸素ボンベあり / 全員で次の車両に移動を宣言 / 描写

ガスマスクと酸素ボンベを装着し、扉を開けて次の車両に乗車する。
ガスマスクを通して新鮮な酸素が供給されている。
探索者が扉を開けて車両の中に入ると、扉は勢いよく閉まり『ガチャリ』と施錠される音が響いた。
酸素ボンベに表示されている時間が 0 へと近づいていく。
そして、酸素ボンベに表示されている時間が 0 になった瞬間、あなた達は気がつくだろう。
探索者全員の身体に変化・異常は見られない。どうやらガス車両ではないことが分かる。

※以下の描写は、左記にある「車両内の様子を確認すると～」へ

この女性は列車の進行方向（5号車）に対して、正面向きに座っていた。
『探索者に向かって』つまり、「進行方向である 4・5号車」方向に頭を向けて倒れている。
突然の列車の脱線により、列車の速度は著しく減速したため、背中側から強い衝撃を受け、
進行方向である前方に、体全体が押し出される形で前の座席に頭を強打し絶命している。
列車の進行方向の推理・ヒント

頭部を強く打ち頭蓋骨と脳が損傷しているため、
捧げられる肉体として不完全であり、車両内に放置されている。

「路線図」と照らし合わせて、電車の進行方向が「右回り」ということが分かる。
列車の進行方向の推理・ヒント

乗客は非常出口がある 1号車へ向かおうとしている足跡。
引きずられた跡は 5号車で見つかった医者引きずられた痕跡。

序盤に路線図を提示しているのであれば、この描写は入れる必要はない。
探索者の乗車券を見つけていない場合の「路線図」の入手方法

【4 両目の車両（2 号車 / セーフ車両）】※酸素ボンベなし / 全員で次の車両に移動を宣言

探索者が扉を開けて車両の中に入ると、扉は勢いよく閉まり『ガチャリ』と施錠される音が響く。しかし、探索者全員の身体に変化・異常は見られなく、どうやらガス車両ではないことが分かる。

車両内の様子を確認すると、足場は悪いが前の車両と損壊具合（3 号車）はあまり変わらない。そして、中央の通路には 1 体のガスマスクをつけた人間が倒れている。

【ガスマスクをつけた死体】

目が覚めた車両で発見した死体と同じく、目出し帽を被り、ガスマスクをつけた男性である。既に息はなく、絶命していることが医学に精通していない者でも感じ得るだろう。

◎＜目星＞or＜医学＞※判定失敗、RP で持ち物を調べるなどでも「教典」は発見できる。死因は不明だが、目出し帽を被っている後頭部に赤いシミが大きくできていることに気がつく。最初に発見した死体と同様に身体が腐敗している。また、懷から厚手の「書籍」を見つける。

◇教典「μ(ミュー) に誓って」

人間の脳と身体を我が主、μ(ミュー) に捧げよ。
かわりに主が持つ、人知を超える知識や技術を得ることができる。
その知識や技術さえあれば、全世界を支配することも可能ではないだろうか。
我が主が持つ知識や技術は人類にとって、神との接触にも近い事象を引き起こし
それに魅せられたものは、我々に協力を惜しまないだろう。

※別ページに目を移すと、気になる文章を発見する。

既にわたしは、先頭車両と最後尾車両の操縦室の扉に「門」を創造した。
電車内で動かなくなった体を最後尾車両に運び、μ(ミュー) が待つ研究所へ捧げる。
我々は先頭車両へ移動し、操縦室の扉の門から脱出する。
それまで身体が持てば良いのだが.....
「門」を活性化させるには各小人の持つ MP を 1 だけ残し
すべてを門に捧げることで、その先の出口から脱出することができる。

◎＜追跡 -30＞※車両の床に対して

床にはいくつも足跡を発見し、そのほとんどが「1 号車へ続く扉」と伸びている。
それに反して、1 号車への扉から 3 号車への扉に何かが引きずられたような後がある。

※酸素ボンベあり / 全員で次の車両に移動を宣言 / 描写

ガスマスクと酸素ボンベを装着し、扉を開けて次の車両に乗車する。
ガスマスクを通して新鮮な酸素が供給されている。
探索者が扉を開けて車両の中に入ると、扉は勢いよく閉まり『ガチャリ』と施錠される音が響いた。
酸素ボンベに表示されている時間が 0 へと近づいていく。
そして、酸素ボンベに表示されている時間が 0 になった瞬間、あなた達は気がつくだろう。
探索者全員の身体に変化・異常は見られない。どうやらガス車両ではないことが分かる。

※以下の描写は、左記にある「車両内の様子を確認すると～」へ

5 号車で発見したガスマスクの男と同様に、目出し帽を取ると脳がなく、空洞になっている。
SAN チェックは GM の裁量にて挿入。

◇教典の内容を読んだ時点で探索者は、シナリオクリアの条件は揃う。

「門の活性化」の方法を知り、5 号車にある制御機関室（操縦室）の扉に
各探索者の MP を消費することで「門の活性化」させて脱出する。
ただし、「未探索の 1 号車」や「先頭車両を 1 号車」と考えている探索者は
ガス車両である 1 号車へと続く扉を開けようとするだろう。

「門の創造」の自己解釈部分。MP 消失度、距離などを無視し、
指定された場所に出ることができる仕様に変更している。

各小人 → 各探索者に置き換えて解釈。

- ・探索者全員の MP を 1 だけ残し、門を活性化させることができる。
 - ・機関室の扉は歪んで開かないが、門を活性化させることにより先へ進むことができる。
- 教典の内容を誤解している場合は GM 発言として補足する。

乗客は非常出口がある 1 号車へ向かおうとしている足跡。
引きずられた跡は 5 号車で見つかった医者引きずられた痕跡。

【前方車両への扉（2号車から1号車への扉）】

前の車両で開けた扉と同じ作りの扉である。

※探索者が全員が2号車にいる場合

なんとか原形をとどめており、手動で開けることができる。

※探索者が全員が2号車にいない場合

扉が歪んでいて開けることができないのか、

施錠されていて開けることができないのか分からない。

乗車した探索者全員

ガスマスク・酸素ボンベをしていない

→ 次項「ガスの判定」

扉自体、他の車両と何ら変わりはない扉。ギミックも同じ。

ただし、探索者が「酸素ボンベ」を使い切っている場合には

1号車がガス車両として確定しているため、探索者全員で乗車できない可能性がでてくる。

進行が停滞する場合には<アイディア>を振らせ、今まで出て来たアイテムやヒントを

もう一度思い出させ、整理するように促す。

それでも動けない場合には、先へ進んでもらうか

取り逃した情報がなければ、現状情報は出ないことをGM発言として探索者に伝える。

※探索者目線にて、ヒントを整理すると、目を覚ました車両（5号車）に

「門」が創造されていることは「教典」より情報は得られている。

探索者が「先頭車両は5号車である」と気づいているか否かで、

ギミックを解いてクリアできるか運や勘、消去法でたどり着くかは探索者次第である。

乗車した探索者全員

ガスマスク・酸素ボンベをしている

→ 「5両目の車両(1号車)」

乗車した探索者全員
ガスマスク・酸素ボンベをしていない

【ガスマスクをつけていない探索者の描写】

扉を開けて車両に乗車する。その瞬間、身体全身が硬直し動かなくなっていくことを感じる。
声を出そうとするも、全身が麻痺していく感覚と朦朧とする意識でうまく声を出すことができない。

※扉は自動的に閉まり、2号車にいる探索者は1号車に乗車した探索者の様子が分からない。

※1号車に乗車した探索者は声が出せないで前の車両にいる探索者に知らせることができない。

※扉自体、前の車両にいる探索者は開けることができる。

全員が乗車していないので施錠されていない。

◎<CON ×(n)>※息を止めるなどのRPをした場合も補足欄の理由により判定発生。

成功：吸い込んだ瞬間、突然のめまいに襲われ、立っているのが精一杯の状態。

失敗：その場で意識は遠のき、昏倒してしまう。

※探索者が対抗判定に一部が成功、一部が失敗している場合

(ガス対抗判定に成功した探索者が、失敗した探索者の様子を見る)

一緒に入った探索者が力なく床に倒れる様子を見る。

自身はそのガスに対して、抵抗力があったようで多少息苦しいが

かろうじて身体は動かさず、声は出せる状態である。

※対抗判定に成功していても立っていることが精一杯なので、今後<技能値 -30>される。

◎<医学>もしくは<応急手当>※医者から取得した応急セットは自動成功

探索者は意識を取り戻す。しかし、身体は硬直しておりその場から動くことはできない。

首から下の感覚が全く感じることができず、全身麻痺（首から下）の状態である。

※探索者全員が判定に失敗した場合 → 『BAD END -C-』へ

※探索者全員が判定に成功している場合 → 次項「5 両目の車両（1号車）」の描写へ

<CON>にかける値（n）について

人間が大きく空気を吸い込んで「呼吸を止められる時間」もしくは、
「有毒な煙やガスなどを吸い込み、身体の機能を保てる時間」は、
訓練を積んだ人間でも4分が限界である。健康状態、心理状態によりその時間は前後する。

各探索者の健康状態、心理状態（「HP」「SAN」の消失の度合い）により、
GMは、各探索者が耐えられる分数を裁量で決定。対抗ルール。（最大値4/最小値1）

各探索者によって（n）の値が異なるため、探索者が疑問を持つ場合は
GM発言として上記のことを探索者にアナウンスする。

判定例）SANとHPの消失している合計値が

0～1 → n=4 / 2～4 → n=3

5～7 → n=2 / それ以上 → n=1

ガスを吸い込んだことにより、全身麻痺（首から下）の状態である。

この判定を受けた探索者は、「他の探索者に担がれる」「引きずられる」などしなければ
その場から移動することはできない。

しかし、意識はハッキリしており、会話は可能。

もちろん「教典」にあるMPを消費し、門からの脱出口も可能。

<医学>もしくは<応急手当>を持っていない探索者の場合

<ショック療法>によるリカバリー可能。

その場合、意識を失っている探索者に1D3のダメージ

乗車した探索者全員
ガスマスク・酸素ボンベをしている

【ガス車両への乗車】

扉を開けて車両に乗車する。その瞬間 扉は勢い良く自動的に閉まり『ガチャリ』と施錠されるような音が響く。ガスマスクと酸素ボンベを装着しているので酸素が供給されている。酸素ボンベに表示されている時間が0へと近づくとき、車両内から『ブシュー』となにかが外へ排出されたような音が響く。どうやらこの車両がガス車両であったようで、ガスが外に排出されガスマスクを外しても安全だということが分かる。

【5 両目の車両（1 号車 / ガス車両）】※ガスの描写・判定後

探索者が入って来た扉の左側には「非常要出口」と非常口のマークが光っている。正面突き当たりには「操縦室」と扉に表記があるが扉はゆがみ損壊が酷いことが分かる。座席も、床に無造作に転がり衝撃が大きかったことが窺える。

【非常出口】

緊急用の脱出出口である。車両に電源が入ってなくても手動で開けられるように脇には赤い文字で緊急脱出用の扉の開閉ボタンがついている。

【操縦室】

「操縦室」と書かれた扉の先は操縦席であることに気がつく。扉は歪み、開けることはできない。

◎<追跡>※車両の床に対して

多くの人の足跡がこの車両に集中しており、特に「非常出口」に足跡が集まっている。非常出口が開いた形跡はない。「操縦室」と表記された扉に向かって何かが引きずられた跡がいくつもあることに気がつく。

☆クリティカル

扉の前に引きずられた跡は扉の前で不自然に途切れている。（扉ではなく門を通った痕跡）

車両全体の様子を確認した探索者は<アイディア>で判定可能。

5号車（先頭車両）> 1号車（最後尾車両）> 4号車 > 2号車 > 3号車の順番で損壊の度合いが大きいことが分かる。

上記<アイディア（クリティカル）>/<物理学>であればさらに詳しい判定可能。

判定に成功した探索者は下記のことを理解する。

『実際の地震による列車の脱線事故において、物理学的に車両の損壊が最も大きくなるのは「先頭車両」である。次に「最後尾車両」。理由は端と端の車両が最も衝撃で揺られるため。損壊の少ない車両は、前後の車両と連結・固定されている真ん中の車両』

開閉ボタンを押しても反応はない。この出口から脱出は不可能。

シナリオ上、乗客をこの車両（1号車）におびき寄せるための要素。

5号車と1号車の機関室の名称と描写が違う。（5号車はプレートが貼られているという描写）

1号車が先頭車両だと思わせるための仕掛け。車内の情報から先頭車両が5号車である疑いが強い中「操縦席」が1号車に現れる。

上記の通り、列車が脱線後、乗客は皆「非常出口」がある1号車に集中する。

動ける乗客がすべてガスが充満している車両で昏倒し、操縦席の扉に引きずられ、運ばれる。

乗客が引きずられた痕跡。このシナリオから出る情報やヒントは以上になる。

この時点で探索者は1号車か5号車の扉にMPを消費し、「門の活性化」後、エンディングへ

【操縦席（1号車/5号車）での「門の活性化」の描写】

操縦席（もしくは制御機関室）の扉に探索者は「門の活性化」を行う。
にわかには信じがたいが、人間には微量の魔力を有しており
その魔力（MP）を消費して「門」と呼ばれしものを開けることに成功した。

限界近くまで MP を消費した探索者に激しい疲労度と倦怠感が襲う。
そして、目の前の扉は青白く光り探索者を迎え入れるかのように
「門」の向こうへと誘うのであった。

5号車の操縦席に「門の活性化」（エンディング A 「TURE」）

「門」を通り、その向こうへ。探索者は青白く光るその先に歩みを進める。
しかし、そこで視界は真っ白になり暗転する。

「... 気がつきました？」

そんな声で探索者は目が覚める。そこは、先ほどまでいた殺伐とした列車車内とは違い、
きれいな印象を受ける室内のベッドに寝かされており、自分のすぐそばにいた
女性の看護師がそう声をかけてくれた。
病院の病室であろう場所には、他の探索者も同じようにベッドで意識を取り戻しているようだった。
口には呼吸器が取り付けられており上手く話すことはできない。
看護師は言葉を続ける。

「あなた方は N 山鉄道の列車事故の唯一の生き残りです。」

「身体は疲弊しきっていて、心身ともに傷は癒えていません。」

「もう少しの間、お休みになってください。そうすれば、じきに退院できますよ。」

悪夢のようなあの事故からの生還。柔らかなベッドの上で安堵し、再び眠りにつくのであった。
『μ（ミュー）は積み木で密室をつくる』生還エンド / 続編シナリオルート

「内藤先生、被験体の準備ができました。新薬のテストを始めましょう。」

公式設定より MP が 1 になった探索者は精神的にかなり疲弊し、
まともに動くことができない。

1号車の操縦席に「門の活性化」（エンディング B 「BAD」）

「門」を通り、その向こうへ。意識が朦朧としている探索者は薄暗い密室空間に迷い出る。
そこには、見たこともない装置やガラスの円柱に入れられた人間の脳。
そして、どこからともなく、昆虫の羽音のような音が探索者の周りから聞こえてくる。

ふと気がつくと、非常に冷たい冷気が探索者の周りを取り囲み、激しい眠気に襲われる。
既に意識が朦朧としていたこともあり、意識は徐々に遠のいていく。

その後、μ（ミュー）により、探索者の生きた「脳」は取り出され
研究素材、あるいは操り人形として意識は保ったまま、永遠に生かされ続けることとなる。
『μ（ミュー）は積み木で密室をつくる』ミ=ゴの研究素材エンド

1号車で探索者全員がガスの抵抗に失敗（エンディング C 「BAD」）

探索者は昏倒し、それから意識も戻ることなく永遠とその車両内で眠ることになる。
その後、探索者を乗せた車両は誰にも見つかることなく、乗客は原因不明の失踪を遂げた。
『μ（ミュー）は積み木で密室をつくる』乗客全員失踪エンド

■シナリオクリア報酬

生還ルート（エンディング A）のみ

- ・脱線車両からの生還　SAN 回復 1d6
- ・CON+1　POW+1
- ・クトゥルフ神話技能+2%（門の創造に触れた）

■キーパリングのコツ

探索者には「ガス車両は何号車なのか」「先頭車両は何号車なのか」
この2つの推理を楽しむためのシナリオになる。

探索者の推察や進行具合を見ながら、GM はヒントの出し方を
調整しながらキーパリングする必要がある。

シナリオ上、上記の推理にあたるギミックを理解すれば

1 本道のシナリオ且つ、NPC 不在なので GM の負担は少ないシナリオ。
ただ、探索者の予想外の行動にはアドリブ・アレンジが必要になるため
GM は「どこに」「どんな」情報やヒントが設置するかなどの
GM 自身が回しやすいように「改変や自己解釈を推奨」する。

ガス車両のギミックは「今際の国のアリス」からギミックを参考にしている。

シナリオ中、原作を探索者が知っている場合があるが問題はない。
「原作と同じギミックであるが、ガス車両が原作通りとは限らない」
など予め告知することにより、先入観からむしろ迷いを生じさせる。

不明点や質問はお気軽に Twitter にて　annie3316_0

■シナリオ解説

◎「ガス車両の考察について」

4 号車から手に入る「車両の見取り図」より、「非常出口」が 1 号車にしかないことが分かる。
走行中は、各車両に設置してある乗車口の扉は閉まっており、開けることができない。
なので「非常出口」に乗客は殺到する。

- ・「懐から出て来た紙切れ」より、『避難して来た乗客を全員誘導するために』という文脈
- ・各車両の足跡を<追跡>により、動ける乗客が全員先頭車両に移動している。

上記のことで、ガス車両は非常口のある 1 号車であると推察することができる。

◎「先頭車両」

探索者の先入観、固定概念を多少利用している。

- ・シナリオ開始位置が「スタート地点」という先入観。
- ・次の車両、次の車両と扉を開けて先に進んでいることで、先頭車両に近づいているという感覚。
- ・見取り図から分かる「1 号車＝先頭車両」「5 号車＝最後尾車両」だという思い込み。

上記の固定概念から「先頭車両を 1 号車」と推察する場合が多い。
最大のヒントは、シナリオの補足情報にもあるように 3 号車にある。

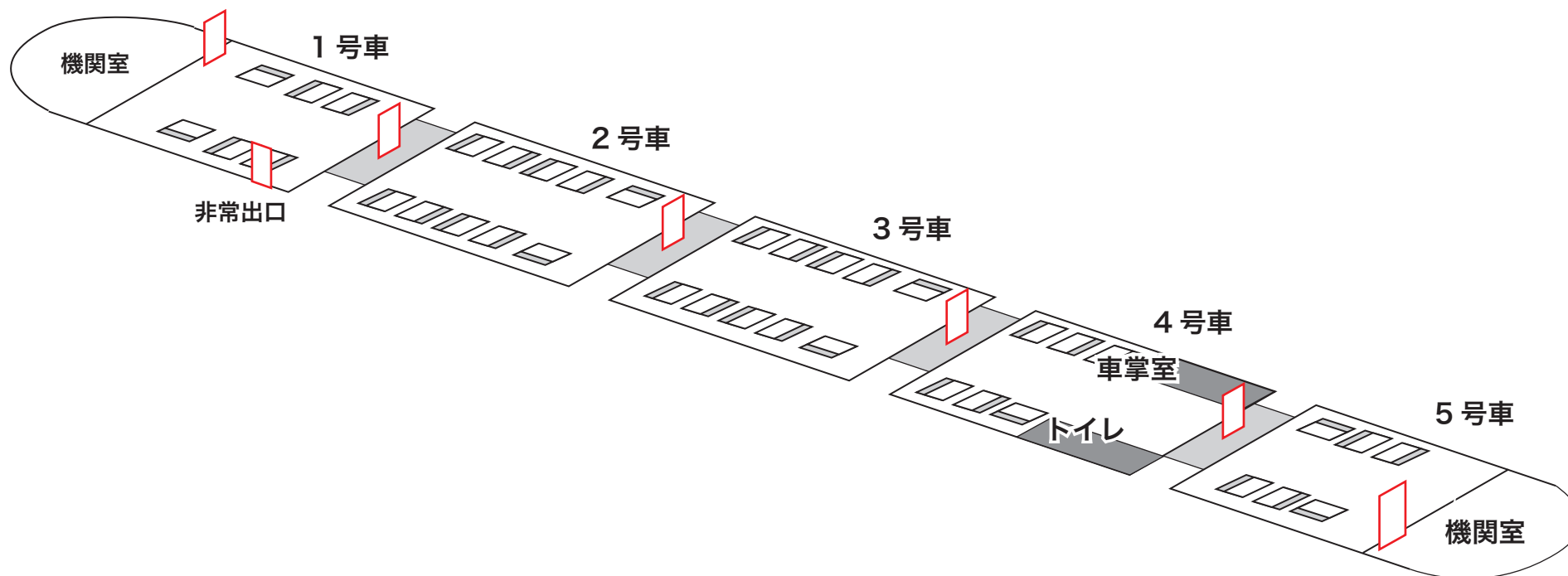
- ・死体の向きの推理（5 号車に向かって座っている）
- ・死体から出てくる切符の行き先（環状線であれば距離・時間が短い方に乗車するのが定石）
- ・車両の破損度合い（シナリオ中の<アイディア>）

厳密に言えば、切符から右回りであると推察できても、車両の先頭車両が
5 号車であると断定することはできない。（マップ上の向きだけで方角が分からない）
ただ、車両の見取り図の作りから、5 号車が「右下」に 1 号車が「左上」に向いているので
進行方向と照らし合わせて「右回り」と考える場合が多い。

上記のことで、先頭車両は 5 号車であると推察することができる。

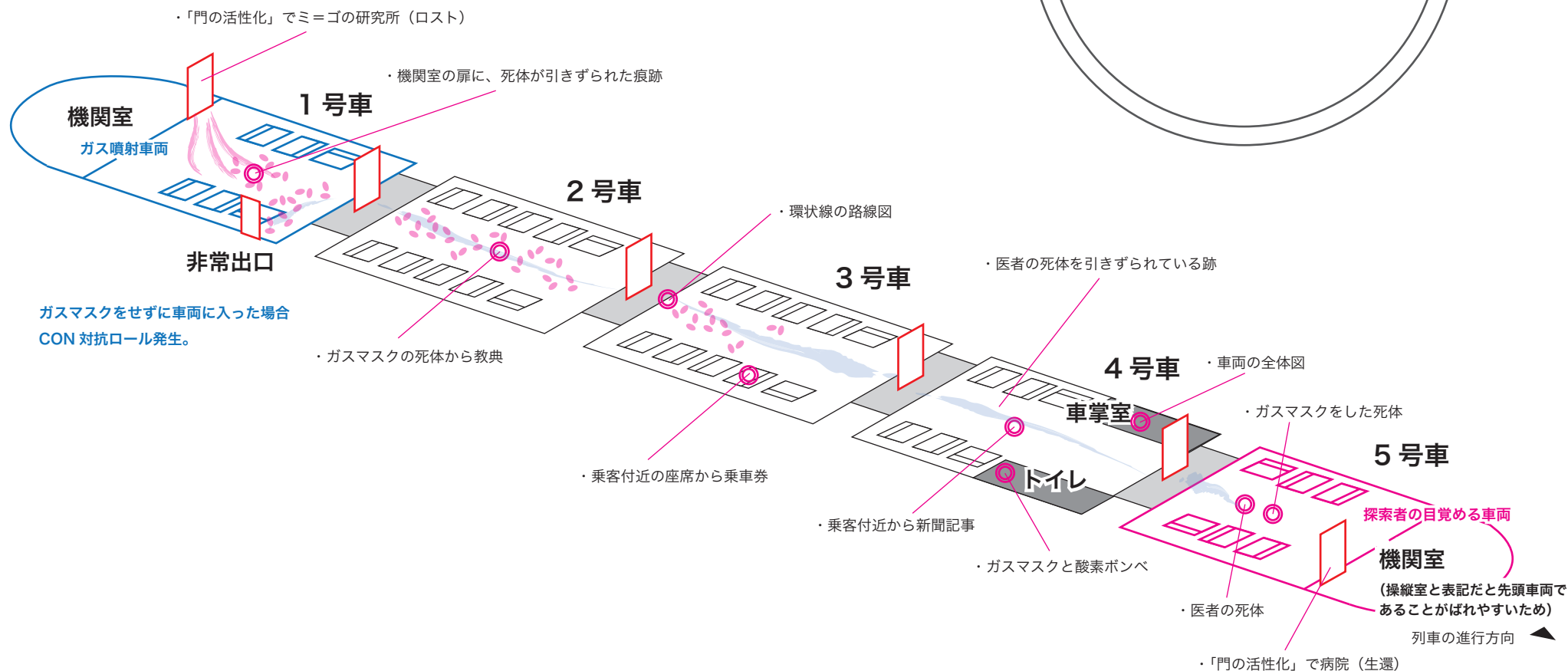
環状線 N 山鉄道第 2 列車 (5 両編成)

全体見取り図



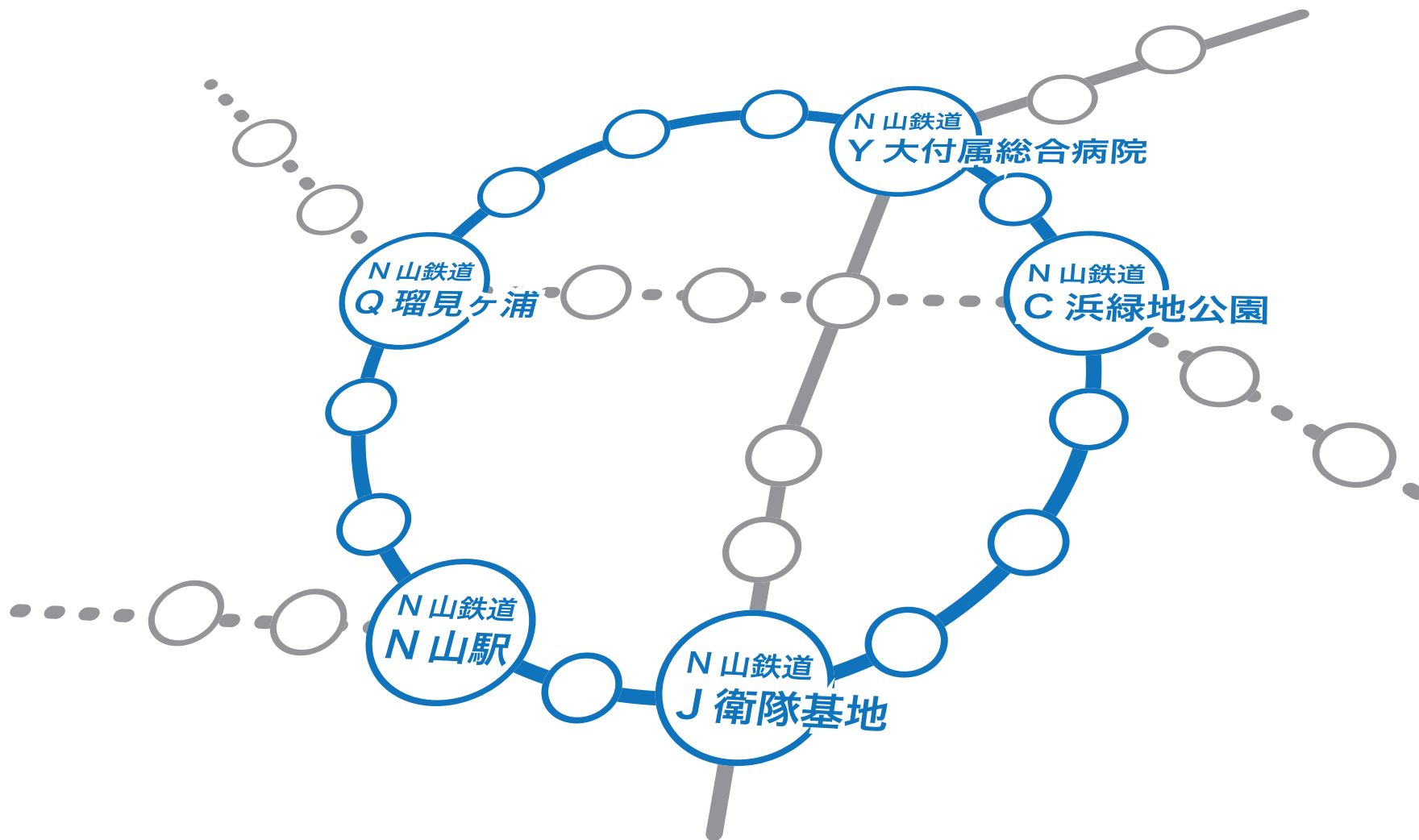
環状線 N 山鉄道第 2 列車 (5 両編成)

全体見取り図

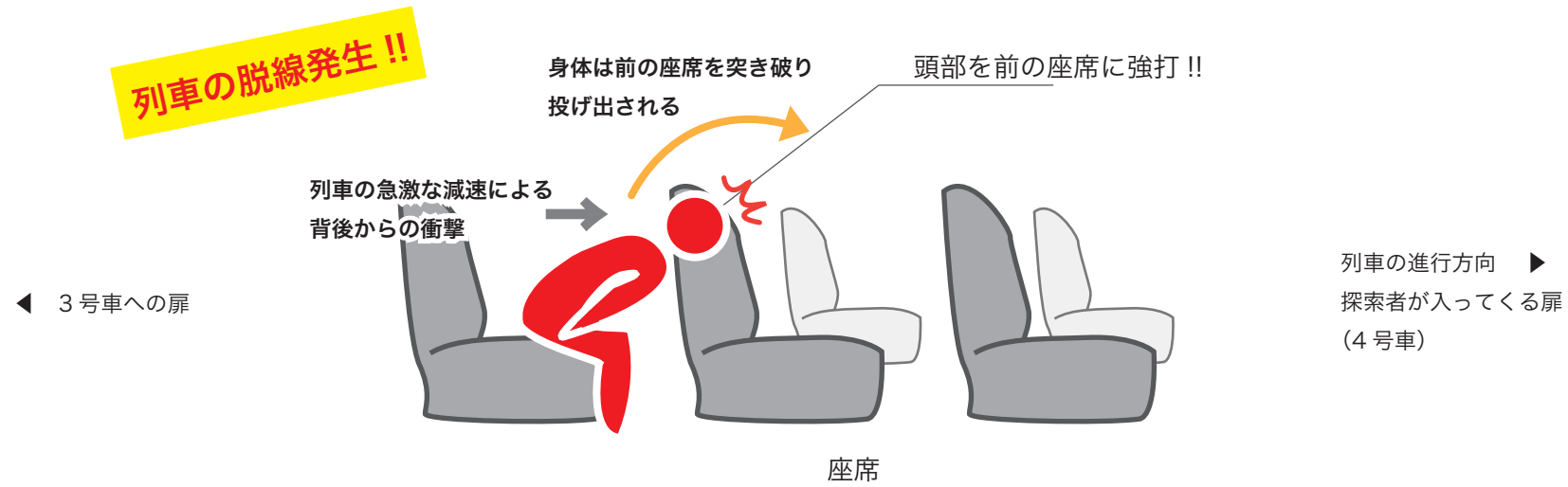


環状線 N 山鉄道

路線図

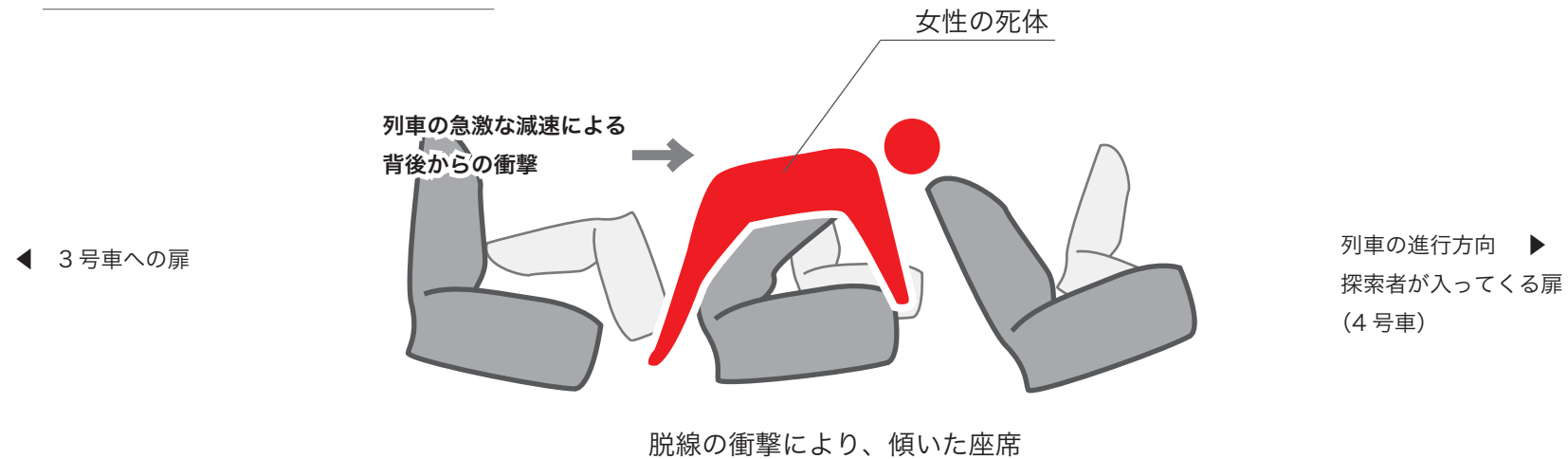


3号車で発見される女性の死体のいきさつ (?)



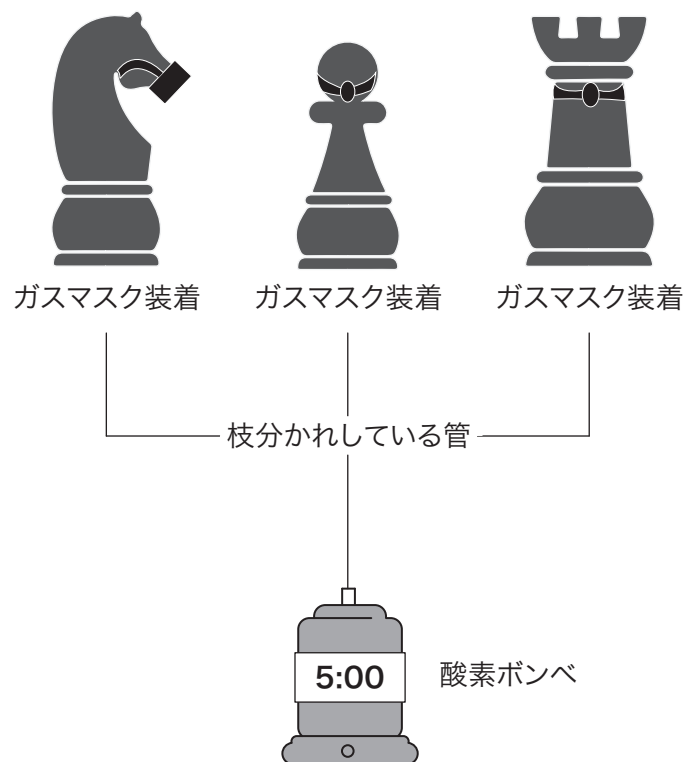
その結果

3号車で探索者が見た描写



【酸素ポンベの補足説明】

- ・ 1つの酸素ポンベから管が枝分かれしており、
その管を接続した瞬間、各管から新鮮な酸素が供給される。
- ・ 全員で使用せず、仮に 1 人で酸素ポンベを使用したとしても
酸素の供給は行われる。



トイレから発見されるガスマスクと酸素ポンベのイメージ

